

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書

1. 龍谷大学×大津市	1
「大津人（おおつびと） 実践講座～ “私が” 地域のためにできることを考える～」	
大学・地域連携によるまちづくりの担い手づくり「大人のアクティブ・ラーニング」	
プログラムの開発	
2. びわこ学院大学×東近江市	5
親子ふれあい遊び事業（親子スキンシップ遊び）	
3. 立命館大学×草津市	9
「草津の魅力」を再発見！	
～草津市内に点在する歴史資産を繋ぐ保存・活用手法の提案～	
4. 聖泉大学×東近江市	13
八日市「商店街にぎわい創出」プロジェクト	
5. びわこ学院大学×滋賀県	15
地域公共交通を維持確保していくためのモビリティ・マネジメントの研究	
6. 長浜バイオ大学×長浜市	18
保育園児の農業体験を通して農業従事者の減少課題を考えるイベントの実施	
7. 龍谷大学×草津市	20
訪日外国人旅行者(インバウンド)に向けた草津の魅力発信	
～ふらっと寄りたい草津旅～	
8. びわこ学院大学×東近江市	22
大学生による子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動	
～S（スマート）にN（ネット）を使えばS（スマイル）に～	
9. びわこ学院大学×大津市	26
就学前児童から科学の面白さを体感させる実験・ものづくりプロジェクト	
10. 滋賀県立大学×大津市	30
「お弁当ラリー」を通じた「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト	
11. 龍谷大学×東近江市	33
「市」を通じた地域の活性化—中山間の「位置」エネルギーを創出—	
12. 立命館大学×甲賀市	37
甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の魅力を創造する旅	
甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）から発信する「すべての人に健康と福祉を（SDGs）」	
13. 立命館大学×甲賀市	41
国史跡紫香楽宮跡を活かした地域振興について	
14. 立命館大学×甲賀市	44
神仏習合の里、甲賀杣谷のストーリーブックをつくる	
15. 立命館大学×草津市	46
芦浦観音寺納豆再現プロジェクト	

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 1

プロジェクト名（活動テーマ）： 「実践講座～」私が「地域のためにできることを考える～」 大学・地域連携によるまちづくりの担い手づくり「大人のアクティブ・ラーニング」 プログラムの開発	
提案者	：龍谷大学政策学部 只友景士ゼミナール 教授 只友景士
自治体担当者	：大津市教育委員会事務局生涯学習課 課長補佐 金森 聖之
大学担当者	：龍谷大学政策学部 只友景士

1. 取組体制

- ◆龍谷大学・・・実践講座【まち歩き編】での講師(理論学習・グループワークの指導)
実践講座へのゼミ生の参画(グループワークでのファシリテーター等)
- ◆大津市・・・実践講座の運営、地域との調整等
- ◆地域・・・実践講座への参加協力(地域の資源、課題等のアドバイス等)
- ◆その他・・・講座の運営補助(講座修了生で組織する「おおつびと倶楽部」)

2. 背景・目的

大津について学ぶ連続講座を通して、①郷土愛の涵養、②学ぶ者同士の仲間づくり、③地域課題の発見とその解決手法の学修、④地域づくりのために行動できる「大津人」の育成を目的として、大津人実践講座を实践する。(連続5回講座)

令和元年度の活動により、受講者と地元団体の具体的な企画案の成案を得るとともに、その中からまちづくりグループも生まれた。令和2年度も同様の効果を得るとともに、これまでの実践講座フィールド地区間の連携も進められると考えている。

3. 活動内容

前半は具体的な街づくりの取り組み事例を地域や企業等の活動実践者から、熱い想いや課題も含め同時に学ぶ。

後半は特定の地域をフィールドに、まち歩きやグループワークを通して、課題発見とその解決手法を学び、まちづくり仕掛け人の養成を図る。最終講では、地域づくりのための企画書(案)を受講者グループごとに発表する。

今年は大津人実践講座、おおつ学を学び「私が地域のために何かできることはないか？」を実施していますおおつ学とは、地域の歴史・文化・環境・産業など、大津に関する学習を通して大津を知り、愛する心をはぐくむとともに、学びあう仲間づくりや地域づくりのために行動するきっかけづくりを目的としています。

○第一回大津人講座歴史探訪コース（11月14日（土）実施）

JR おごと温泉駅→千野→安養院→和田秀純の墓→雄琴城跡→福領寺→雄琴会館→JR おごと温泉駅



写真1 良源の母が住んでいたとされる安養院



写真2 雄琴会館

第5回 真野のまち歩き②～“私たちが”地域の為にできること～（2021年2月23日）



写真3 真野の入江跡の説明を受ける



写真4 グループワークの成果発表

○体験学習の内容として

- ・歴史探訪〔歴史博物館学芸員と歩く大津の歴史旅〕
- ・イーチャン劇場〔地域住民によるオリジナル寸劇体験〕
- ・大津再発見〔明智光秀ゆかりの西教寺に学ぶ〕
- ・まち歩きでは真野学区をフィールドとした街の資源や課題を発見していきます。

4. 目的の達成状況、成果

■実施スケジュール〔当初予定〕

- ・4月～6月 講師、地域等調整、受講生募集
- ・6月～2月 実践講座（閉講式、体験学習、理論学習、GW、発表会、修了式）

■2020年実際のスケジュール

開催日	内 容	講師名	開催場所
第1回 11月14日（土） 12:30～16:00	「歴博学芸員と歩く歴史 絵巻 ～雄琴城とその周 辺を訪ねて～」 ・オリエンテーション ・現地での歴史散歩	トータルコーディネー ター 成田賀寿代 氏 大津市歴史博物館学芸 員 和田 光生 氏	J R湖西線 「おごと温泉駅」 周辺地域
第2回 12月5日（土） 13:00～16:30	「オリジナル脚本でたど る 地域の伝説～衣装つ けて ロパク役者体験 ～」 ・講話、観劇、体験	南滋賀村の歴史を学ぶ 会 会長 大伴 偉造 氏	南滋賀公会所
第3回 1月23日（土） 13:30～15:30	「麒麟とは光秀公か？ ～西教寺編～」・講 話、寺院案内	宗教法人 西教寺 執務主事 前阪 良樹 氏	天台真盛宗総本山 西教寺
第4回 2月6日（土） 10:00～16:00	「真野のまち歩き① ～まち歩きを仕掛ける～」	龍谷大学政策学部 教授 只友 景士 氏	真野公民館
第5回 2月23日（火・ 祝） 10:00～16:00	「真野のまち歩き② ～“私たちが”地域の 為にできること～」		真野公民館周辺地域

- 受講生、大学生、地域が同じ場で議論し、市民協働の実践的な学びの場を作ること、議論の活性化を図るとともに、立場の違うもの同士の相互学習を進める。地域づくりのコミュニケーション能力の養成を図ることができた。
- 特定の地域をフィールドとすることで、より具体性のある企画案となり、受講生の主体性が育まれるとともに、次の行動への原動力を養成することができた。
- 大学生にとっては、多くの大人とのかかわりの中で、グループワーク等におけるファシリテーター役として参画することで、自己肯定感や自己有用感を涵養するとともに、まちづくりの現場に関わることで、実践的な学びとなった。
- 地域にとっては、大学と連携し、生涯学習課らのまちづくりを経験することにより、まちづくり協議会など今後における学びを実践した地域づくりの参考となった。

- 市内各学区に広げていくことで、全市的なシビックプライドの醸成につながる。
- 講座終了生による組織「おおつびと倶楽部」が設立され、講座との連携がなされることで、講座終了後も継続した活動が期待されている。
- 2020 年度の講座は、大津市真野地区をフィールドとした。真野地区では、真野文化振興会の豊かな活動実績を蓄積しており、そうした文化振興会の学びの蓄積を活用した。また、1993 年（平成 5 年）に刊行された『わがまち真野』（大津市立真野小学校発行）、『真野のむらのきろく』（真野小学校昭和 40 年卒業生）などの豊かな記録を発掘することができた。地域の学びを組織化し、地域づくりに活かす手懸かりを得ることができた。
- おおつびと倶楽部との連携により、生涯学習講座からまちづくりの活動につなげる具体的な手法や、取り組む方々の思いとその活動をすることができた。

5. 課題、懸案事項

- 大津人実践講座は、2016 年度より展開しており、2020 年度で 5 年目を迎えた。2017 年度からは、具体的フィールド（学区）を定めて学びを設計してきた。受講生、自治連合会など地域の団体、大学の三者が学び合うユニークな学びのスタイルが定着してきた。多くの受講生のなかから、まちづくりに取り組みたいとの意欲を持った市民（修了生）を多く輩出してきていること、協力頂いた地域においても有益な学びを創出できていることから、今後の課題としては、二つあげられる。

① 受講生の終了後の学びの継続、活動の継続への大学の関わり方

- ・受講生の OB・OG の団体である「おおつびと倶楽部」が結成され、受講生の OB・OG 会的なつながりと活動が進められている。2020 年度は、講座最終回に「おおつびと倶楽部」のメンバーにも参加頂き、おおつびと倶楽部の活動内容を伺う機会を設けることができた。これまで、大津市教育委員会と大学で講座の開発運営を進めてきたが、講座修了生への継続的な学びや活動、フィールドとしてきた地域における学びの機運をどう育てるのかと言った新たな課題が生まれてきている。こうした課題に龍谷大学や大津市教育委員会がどのように関わるのかについて協議し、新たな枠組みを構築することが求められる。

② フィールドにした地域と大学の関係性

- ・フィールド地域からは、講座実施による学びの成果を高く評価して頂いており、講座修了後も継続的な龍谷大学との関係継続を求める要望が強い。そうしたことから大津市教育委員会と龍谷大学とでは、講座を通じた学びの機運を育て、地域に継続的に学びの仕組みを構築し、学びの文化を醸成する取り組みを検討している。そのためには、自治連合会など地域団体なども交えて、地域に住民主体の学びを実装する取り組みを検討する必要がある。
- ・地域に継続的に学びの仕組みを構築し、学びの文化を醸成する取り組みの手懸かりとして、フィールド地域間の連携交流を進めることを検討していた。2020 年度当初、フィールド地域間の連携関係の構築を検討していたが、2020 年度はコロナ禍で、連携関係構築のための取り組みは着手できなかった。今後は、フィールド地域間の連携関係の構築と共に、地域における自主的学びの構築のための研修プログラムの開発も求められる。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 2

プロジェクト名（活動テーマ）： 親子ふれあい遊び事業（親子スキンシップ遊び）	
提案者	：びわこ学院大学教育福祉学部 教授 奥田愛子・奥田ゼミ
自治体担当者	：東近江市子育て支援センター 所長 三原牧子
大学担当者	：びわこ学院大学地域連携研究支援課 課長 澤井二三夫

1. 取組体制

本事業は、びわこ学院大学奥田ゼミおよび東近江市子育て支援センターの連携により、以下の取り組み体制で実施した。

＜びわこ学院大学奥田ゼミ＞

- 育児ストレス低減を目指した「親子スキンシップ遊びプログラム」の作成と実施
- 「親子スキンシップ遊びプログラム」参加者（承諾者のみ）を対象とした効果検証（育児ストレスチェックシートの実施・分析および事後の聴き取り調査）

＜東近江市八日市子育て支援センター＞

- 「親子スキンシップ遊びプログラム」の作成および実施に関する助言指導
- 「親子スキンシップ遊びプログラム」参加者（承諾者のみ）を対象とした聴き取り調査に関する助言指導

2. 背景・目的

近年、核家族化や労働環境の変化に伴い、育児に関わるさまざまな課題が浮き彫りとなっているなか、東近江市においても未就園児とその保護者への支援が同様に課題となっている。そこで提案者らは、乳幼児と保護者を対象にストレス低減のための「親子スキンシップ遊びプログラム」を作成・展開したところ、育児ストレスの低減傾向が確認された（2019 年度）。しかしながら、「親子スキンシップ遊びプログラム」の内容や参加者個々の状況把握など、課題が残った。

よって、今年度は「親子スキンシップ遊びプログラム」の改善と実践による効果測定、および参加者個々の育児ストレスに関する状況把握について検討した。

なお、本事業での成果は、乳児期の親子のスキンシップが親・子双方にとって重要であることのエビデンスとして、育児ストレス低減と同時に、愛着形成をはじめとした望ましい発育発達の一助となるものと考えている。

3. 活動内容

東近江市八日市子育て支援センターでの乳児とその親を対象とした集いの場所である「赤ちゃん広場」において、「親子スキンシップ遊びプログラム」を実施し、その効果検証を行った。

今年度の活動について以下に示す。

●「親子スキンシップ遊びプログラム」の作成（2020 年 4 月-6 月）

ゼミ授業等を活用して、昨年度の「親子スキンシップ遊びプログラム」での課題をもとに内容を再考し、新たに「親子スキンシップ遊びプログラム」の素案を作成した。さらに、子育て支援

センター担当スタッフと協議し、最終的に 30 分程度の改訂版「親子スキンシップ遊びプログラム」を作成した。

●「親子スキンシップ遊びプログラム」の実施（2020 年 7 月-11 月）

毎月第 1 火曜午前に開催される、東近江市八日市子育て支援センター主催の「赤ちゃん広場」に参加する親子を対象に実施した。今年度は 4 回の実施で、参加者はのべ 140 組であった。

なお、各回の実施にあたり、事前に子育て支援センターのスタッフからの助言・指導を受けた。



以下の 1-6 のうち、毎回 4 つ程度を実施

1. お名前は: 歌に合わせて自己紹介「お名前は? ○○(名前)素敵なお名前ね〜♪」
2. だるまさん: 歌に合わせて手遊びをする。
3. いっちこ にちこ: 歌に合わせて子の身体を刺激する。
4. ふくすけさん: 歌に合わせて子の足指を刺激する
5. なっとうねばねば: 歌に合わせて子の手のひらを刺激する
6. ボール遊び: 手のひらに収まるボールを、子の目の前で円を描くように大きく回す。

また、今年度は、以下に示す新型コロナウイルス感染症拡大防止の事前対策（①・②）および実施施設の新型コロナウイルス感染症拡大防止ガイドライン（③・④）に従った。

①体温の確認（実施 5 日前～当日朝）

②マスクの着用

③施設入口での手指消毒

④実施直前の手洗い・手指消毒

⑤「赤ちゃん広場」のスケジュールに応じて、10 組程度ごと、別室での実施。



●育児ストレスチェックシートの実施（2020 年 7 月-11 月）

「親子スキンシップ遊びプログラム」の実施後、趣旨説明を経て承諾を得た参加者（母親）に「母親の心の健康チェックシート（MPHC）」（清水 2017*）を実施した。本チェックシートは、母親の心理的な健康状態について、“育児の喜び” “子どもとの絆” “夫への感謝” に関する項目で構成された育児幸福感尺度、および“心身的疲労” “育児不安” “夫の支援のなさ” に関する項目で構成された育児ストレス尺度とで構成されている。対象者へは「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。また、聴き取り調査の対象者を抽出するため、ニックネームでの記名を求めた。

*清水嘉子(2017) 母親の心の健康チェックシートハンドブック. パレード.

●聴き取り調査の実施（2020 年 11 月）

複数回の参加者を中心に聴き取り調査を実施した。対象者へは個別に趣旨説明と調査への協力を求め、同意が得られた 10 名に実施した。聴き取りの内容について、得られたデータは本事業にのみ使用し、分析終了後はデータを廃棄すること、また、分析にあたり、個人が特定されるような内容は記述しないこと、居住地や子の性別等、聴き取り内容の本質を変えない範囲での加工を行うことを対象者との間で確認した。

聴き取りは以下の①から③の問いかけを中心に行い、子どもへの配慮から、調査の時間は対象者一人当たり 5 分程度を心がけ、対象者の表情や口調なども丁寧に観察した。

①普段の生活の中でお子さんと二人だけで触れ合う時間はどれくらいありますか。

②お子さんといっしょに出かけるところはありますか。

③「赤ちゃん広場」（「親子スキンシップ遊びプログラム」）に参加されてから、普段の生活で何か変化はありましたか。

4. 目的の達成状況、成果

図 1 に「親子スキンシップ遊び」への参加回数と育児ストレスチェックシートの平均値の推移結果を示す。今年度は 4 回参加がいなかったため、3 回参加までの分析となった。

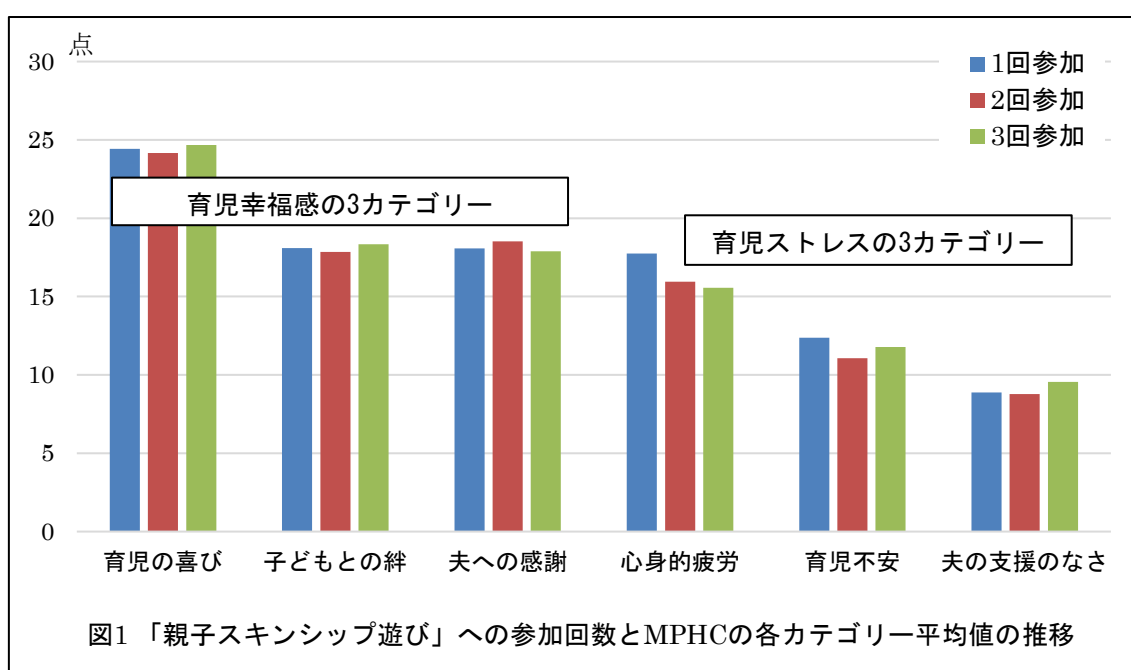


図 1 より、育児幸福感の項目については、参加回数に関わりなく“育児の喜び”と“夫への感謝”、“子どもとの絆”で高い値となった。また、育児ストレスに関する項目では、“心身的疲労”については参加回数を追って低下傾向が見られ、“夫の支援のなさ”においては 3 回参加者がやや高い値となった。同様に“育児不安”についても 3 回参加者がやや高い傾向が見られた。このことから、育児支援事業（「親子スキンシップ遊びプログラム」）への複数回の参加によって、育児不安の低減を図っていることや、参加を契機に親子での関わりの変化が生じていることが窺われた。

次に、聴き取り調査では、子どもと 2 人だけで過ごす時間が長い、いわゆる“ワンオペ育児”の様子が語られ、育児不安に陥りがちなストレスの高い状況が想像された（表 1）。しかしながら、子どもとともに出かけることや、子どもとともに楽しむ内容の語りからは、子どもとの密な時間が育児の喜びや子どもとの絆を高めている状況も考えられ、保護者（母親）の育児への捉え方が実感度に影響することが明らかとなった。また、「親子スキンシップ遊びプログラム」参加

後は、「(子どもと)歌を歌う事が増えました」「遊びを知れたことですかね」「子どもとスキンシップをする大切さがわかりました」「(子どもと接する)参考になりました」などのように、乳児とのノンバーバルな状況における新たな知見について語られ、「親子スキンシップ遊びプログラム」参加を契機とした育児ストレス低減効果の実感を確認できた。

表 1 聴き取り調査の概要

	2人で過ごす時間	一緒に出かけているところ	参加後の変化
A	4 時間	実家	歌を歌う事が増えた。
B	6 時間	散歩その他	
C	5 時間	友だちとランチの時 他の子育て支援センター事業	遊びを知れたこと。
D	5 時間	買い物	子どもとの関わり方の変化
E	6 時間以上	週末の買い物	子どもと関わる参考になった。
F	5 時間	実家	
G	5 時間	実家・親子で習い事・ドライブ	子どもとの遊びの変化
H	4 時間	実家・ベビーカーで散歩	子どもの反応が良くなった
I	4 時間	買い物	子どもの接し方
J	3 時間	散歩など	スキンシップの大切さ

5. 課題、懸案事項

これまで述べてきたように、本事業を通して、育児支援事業の重要性について再確認できたものとする。

前田・中北(2017**)は、育児ストレスの要因として、「妊娠・出産への思い」「子育てに関する意識」「自分のための時間の有無」「産後の経過と母親自身の体調」「子どもの反応」「周囲からのサポート」「経済的側面」を挙げ、「子どもをもつことでの生活や意識の変化」や「生活環境」の違いを見極めた支援の必要性を主張している。本事業の結果からは、保護者（母親）一人一人の置かれている環境、状況、抱えている問題が異なっている様子、および、それぞれの抱える育児ストレスの実感度は異なるものの、育児支援事業（「親子スキンシップ遊びプログラム」）への参加が、育児ストレス対処の契機となっていることが考えられた。それは、コロナ禍の活動自粛状況での複数回の参加者の存在からも明らかである。こうしたことから、今後もよりいっそう育児支援事業が地域に根付くための仕組みづくりが課題となるものとする。

**前田 薫・中北裕子(2017) 乳幼児をもつ母親の育児ストレスの要因に関する文献検討.

三重県立看護大学紀要 21 巻 pp. 97～pp. 108.

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 3

プロジェクト名（活動テーマ）： 「草津の魅力」を再発見！～草津市内に点在する歴史資産を繋ぐ保存・活用手法の提案～	
提案者	：草津市教育委員会歴史文化財課 課長 岩間一水
自治体担当者	：草津市教育委員会歴史文化財課 主任 馬場 将史
大学担当者	：立命館大学理工学部 建築都市デザイン学科、 及川清昭特命教授、青柳憲昌准教授、藤井健史助教

1. 取組体制

以下の体制で取り組んでいる。

- ・草津市教育委員会歴史文化財課 岩間一課長、馬場 将史
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 及川清昭特命教授
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 青柳憲昌准教授および建築史研究室
- ・立命館大学理工学部建築都市デザイン学科 藤井健史助教および建築設計研究室

2. 背景・目的

本市には寺社や歴史的な町並みなどの歴史資産が残されており、それらをまちづくりや観光へ活用する方法の検討が不十分である。観光資源として活かすためには個々の歴史資産を繋ぐビジョンを持ち、全体としての価値を高める必要がある。そこで、立命館大学や地域住民とともに、歴史資産を対象とした調査を実施し、「草津の魅力」を再発見し、協働しながら議論・提案を行い、本市の歴史資産の総合的な保存・活用方法を検討する。

3. 活動内容

1) 草津市常盤地区の歴史資産を巡る観光ツアーの実施 (新型コロナウイルスの影響により未達成)

2019 年度に実施したワークショップ「バス＋徒歩で巡る、草津いいもの探しツアーを考えよう」では、歴史資産、絶景スポット、食べ物スポットを地図上に並べながら、常盤地区を中心に草津の魅力再発見し、ストーリーを込めながらこれらを繋ぐルートマップを作成してもらった。その成果を踏まえ、主催をしていただく市民団体「草津おみやげラボ」とツアー内容の企画し、実際のバスツアーを実施する予定であったが、新型コロナの影響により実施できなかった。今のところ、実施の目は立っていないが、今後自体が落ち着けば、実施の方で市民団体の方々と調整したい。



実施予定であった
ツアーのチラシ

2) 街道歴史散策 AR アプリの作成

東海道および中山道はそれ自体が旧街道という歴史資産であり、沿道にも多くの歴史資産が残されている。草津にとって観光やまちづくりの要所であるが、点在する歴史資産への誘導案内は十分に整備されているとは言い難い。例えば、草津宿本陣ですら草津駅からの誘導は十分ではなく、来街者にはわかりづらい。現状では旧街道を歩いているという実感を伴いづらく、歩いて楽しい歩行空間にはなっていない。草津市の歴史文化を活用した観光やまちづくりを推進する上での課題であると言える。

そこで、AR を活用して歴史を学びながら楽しく散策するためのアプリケーション開発に取り組んだ。スマートフォン・タブレットを用いて、東海道・中山道を歩きながら道中に点在する観光資源に直に触れ、そこからさまざまな歴史学習情報を取得し散策を進めていくことができる。言わば、原寸大の旧街道博物館のような、東海道・中山道を歩いて感じ、学べる AR アプリケーションの作成を目指し、試作品の作成を行った。



@マチアルキARアプリケーション
<https://www.machiaruki.jp/index.html>



位置情報が結ばれた現地の対象物にカメラをかざすと、写真、テキストなどのコンテンツがAR形式で画面上に出現する。

使用した AR アプリケーション



①アプリをダウンロード



②各ポイントへ向かう



③歴史遺産の情報が出現



④行った地点が登録される

試作 AR アプリの使用の様子

計画範囲は草津駅から延びるサンサン通りが中山道と交わる交差点から、東海道への京都からの入り口とされていた黒門の址地がある交差点までとした。その範囲で 10 か所の歴史資産をピックアップし、町人が行き来する当時の様子を伝える動画や静止画を作成し、これに説明文を加え AR コンテンツとした。また、街道交流館や夢本陣といった観光施設、老舗やカフェといった店舗情報も AR コンテンツに加えた。

〈対象観光資源〉



歴史観光資源

- ①大路井道標
- ②追分道標
- ③草津宿本陣
- ④脇本陣藤屋与左衛門家跡
- ⑤本陣田中九蔵家址
- ⑥常善寺
- ⑦真教寺
- ⑧太田酒造道灌蔵
- ⑨立木神社
- ⑩京口見附黒門址

街道交流館の館長
さんに相談して歴
史観光資源を選定

観光施設・お店

- a. 夢本陣 (・松利老舗
b. 街道交流館 (・抹茶庵けんしん etc...))

AR コンテンツの作成箇所



草津宿本陣



追分道標



本陣田中九蔵家址



京口見附黒門址



立木神社



常善寺



江戸時代、東海道と中山道が分岐・合流する宿場として栄えた草津宿。草津宿街道交流館は、その中ほどに建つ歴史資料館です。江戸時代の旅と街道を中心に、展示と体験を通して草津の歴史・文化を紹介しています。2階展示室には江戸時代の東海道の町並みが模型で再現されています。

街道交流館



どら焼きの販売をしている「松利老舗」さんの創業は江戸末期。現在は四代目と五代目がお店を切り盛りされています。昔ながらの味を保ち、作りたてを味わってほしいと店内での手作りにこだわり、五代にわたりその思いを大切に受け継がれています。

松利老舗

AR コンテンツの作成例

4. 目的の達成状況、成果

草津市常盤地区の歴史資産を巡る観光ツアーの実施は、実施が許される状況になれば実施予定であるが、残念ながら今のところ見通しは立っていない。

街道歴史散策 AR アプリの作成では、試作アプリを作成した。中山道・東海道沿いの歴史資産を AR 技術で繋ぎ、東海道・中山道を歩いて感じ、学べる AR アプリケーションとなった。「草津の魅力」を再発見し、歴史資産の総合的な保存・活用方法を示す取り組みになったと考えており、当初の目的を概ね達成できた。また、この AR アプリケーションは範囲拡張なども容易にできるため、本市の歴史資産をより広く、いろいろな文脈から繋ぐことも可能であると考えている。本市の歴史資産を繋ぎ全体としての価値を高める試みとして、今後も継続して活動を展開していきたい。また、AR アプリコンテンツ作成の活動自体が、色々な立場の人がまちづくりに参加するプラットフォームとして機能していく可能性もあり、そういった側面も踏まえて地域や史との協働を強めていきたい。

5. 課題、懸案事項

試作段階では、各コンテンツの絵図や説明内容について、十分な情報収集はできないまま作成を進めた。今後、地域のボランティアガイドの方々に絵図や説明内容についてのアドバイスを頂き、ガイドの方々との協働でさらに魅力的なコンテンツ作成を進めていく予定である。最終的には一般に公開し、観光促進や児童学習への活用を目指している。そのためには市の関係部課との連携・協議が不可欠であり、継続的に運用・活用していけるアプリケーションとして位置づけていくことが課題である。実際に運用できるようになった際には、アプリの認知度を高める手立てが重要となる。観光案内所や街道交流館において AR アプリケーションのダウンロードリンクの QR コードをあしらったポスター掲示やポストカード配布を検討しているほか、駅ペDESTロリアンデッキや街道交流館前の広場への QR コード路面標示の設置も検討している。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 4

プロジェクト名（活動テーマ）： 八日市「商店街にぎわい創出」プロジェクト	
提案者	： 聖泉大学 学長・小山敦代
自治体担当者	： 東近江市・商工労政課 主事・本間 倭
大学担当者	： 人間学部准教授・脇本 忍

1. 取組体制

- ・聖泉大学・・・学生主導で商業調査、フィールドワーク等を行い教員の指導をもとに商店街にぎわい創出プラン立案及び短編映像の制作を行う。
- ・東近江市・・・大学と商店街及び各商店との調整を行う。
- ・八日市商店会連盟・・・事務局である八日市商工会議所を通じ、各商店街との調整を行う。
- ・JTB滋賀支店・・・PR活動協力を行う。
- ・あいのみ企画・・・制作する短編映像の指導、協力を行う。

2. 背景・目的

東近江市の八日市駅周辺は、かつては市場町として賑わい、5つの商店街組織にそれぞれ個性豊かな商店が立ち並んでいるが、来店者減少等により業況は厳しい状況にある。このような状況において、かつてのにぎわいを蘇らせるため、若者目線で学生主導の取組を進める「商店街にぎわい創出」プロジェクトに取り組めます。

3. 活動内容

本プロジェクトは、2年計画で実施することとし、八日市の商店街を中心とする商業調査と政策提案を行います。

映像を活用した取組手法を採用し、地域の商店を学生が訪問し、若者ならではの視点からインタビューとディスカッションをしながら映像記録にまとめ、社会心理学のフィールドワーク研究技法を駆使して、「商店街にぎわい創出プラン」を提案する。

また、記録映像を商店街地域の魅力発信につながる短編にまとめ、記録媒体の配布やSNSを活用したPRを市内外に積極的に行うことで、商店街地域に魅力向上と交流人口増加につなげる。短編作品は、学生と市民が主役を演じるセミドキュメンタリーとし、各商店主が生の声で街や商店街のPRを行うものとする。



4. 目的の達成状況、成果

コロナ禍において、行動制限があらゆる方面であったが、遠隔的なコミュニケーションを主にして一定の成果を得られた。

5. 課題、懸案事項

コロナ禍での本年の活動縮小は妥当であったと考えられる。今後終息の際には当初の予定に即した活動を実施し、さらに積極的に八日市の商店街のにぎわいに寄与したい



2020年11月18日 読売新聞



2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 5

プロジェクト名（活動テーマ）： 地域公共交通を維持確保していくためのモビリティ・マネジメントの研究	
提案者	：びわこ学院大学 学長 沖田 行司
自治体担当者	：滋賀県土木交通部交通戦略課 芝 久生
大学担当者	：びわこ学院大学教育福祉学部 教授 パン ジュイン

1. 取組体制

- ・びわこ学院大学 地域調査プロジェクトチーム
（プログラムの検討、作成、実施、結果とりまとめ、分析）
- ・滋賀県土木交通部交通戦略課
（小学校との連携体制の構築、強化、プログラムの検討、分析の補助）
- ・東近江市公共交通政策課
（小学校との連携体制の構築、強化、プログラム実施の補助、分析の補助）
- ・県内小学校等 （プログラムの実施、分析の補助）
- ・近江鉄道沿線市町 （プログラム実施の補助）

2. 背景・目的

人口減少社会の到来に伴い、全国的に地域公共交通の利用者は減少していく傾向にある。地域住民の大切な移動手段である地域公共交通を維持確保していくためには、利用者増が必要不可欠であり、その中でも特に未来の地域を担う子どもたちが主体的に公共交通の意義や利便性、重要性について普段から継続的に考えるようになることが重要である。

そのため、本取り組みでは、子どもたちが公共交通に対する問題意識を醸成することを目的に、子どもたちに対して公共交通全般について考察するプログラムの作成等を推進する。

3. 活動内容

本プロジェクトは、主として近江鉄道沿線にある小学校にて、公共交通に対する問題意識を醸成するためのプログラムを実施する。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により 9 月までは実施できない状態にあったので、スケジュール的には、当初の予定よりかなり遅れたが、9 月から 10 校の小学校のエントリーがあった。実施校と連携してコロナウィルス防止対策を講じながら、9 月から 12 月まで、10 校 550 名の生徒を対象に実施した。

交通環境学習実施例：箕作小学校

開催日時：2020年11月26日（木） 1～4時間目（8:40～12:10）

対象生徒数：86名

学習内容

◆座学（パワーポイント使用）

◎しがけんののりもの

- ・車以外の乗り物の学習
- ・公共交通ってなに？
- ・東近江市の公共交通
- ・バスのことを学習しよう
- ・公共交通〇×クイズ
- ・きっぷの買い方

◆路線バスの乗車体験

◎バスの乗り方

- ・路線バスの説明
- ・路線バスの乗り方、降り方
- ・乗車マナーについて

◎バリアフリーについて

- ・車いすでの乗車体験

◎バスの観察、秘密みつけ

- ・バスの工夫や仕組み

小学校での公共交通学習の様子



4. 目的の達成状況、成果

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、予定していたスケジュールからは遅れたものの、9月に入ってから10校のエントリーがあり、11月まで、9校で実施することができ、12月11日には、最後の1校で実施しました。学習内容では、座学だけではなく、乗車体験やバスの観察・秘密見つけ、車椅子での乗車体験などの多彩なプログラムを組み込まれ、生徒たちは、楽しんで学習でき、公共交通に対して関心を持つようになった。またプログラムについては、ソーシャルディスタンスを保つために当初に計画していた通りに実行することはできなかったが、本研究の目的は概ね達成できたと思う。

5. 課題、懸案事項

今後は、生徒がより理解しやすいように、紙芝居、寸劇などのプログラムを開発し、また地域の大学と小学校が協力して地域の公共交通について考え、主体的に取り組む場を作り出すことで、地域公共交通の維持・確保につなげていくための体制作り、そして、本事業を持続的な取り組みにするため、県、市、町と大学の連携を強化するとともに、小学校との協力体制を構築していきたい。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 6

プロジェクト名（活動テーマ）： 保育園児の農業体験を通じて農業従事者の減少課題について考えるイベント の実施	
提案者	：長浜バイオ大学 農業サークルWALK 土口 修平
自治体担当者	：長浜市産業観光部農業振興課 山下 雅之
大学担当者	：長浜バイオ大学 地域連携・産官学連携推進室 熊崎 厚作

1. 取組体制

農業サークル WALK の本学在学生在が主催し、長浜市、営農組合の協力で実施する。大学近隣の営農組合からは、本事業の活動で必要な農地及び農機具を貸与してもらえることになっている。サツマイモの耕作と育成は、主に農業サークル WALK が行い、収穫やクラフトづくりなどのイベントは保育園児と一緒に実施する。

2. 背景・目的

長浜市内の農業従事者の減少という課題に際し、人材不足の解消を図るためのきっかけづくりを目的に、2019 年度は、地域の保育園児たちとイベントを行い、農業の楽しさを体験してもらった。2020 年度も引き続き農業体験を通して、お仕事の意味や楽しさを感じ取ってもらえるような活動を実施する。

3. 活動内容

5 月 06 日（祝） サツマイモ作付け

9 月 25 日（金） 地域の保育園児とのサツマイモの収穫イベント

9 月 29 日（火） 地域の保育園児との芋版クラフトづくり *実施日は気候により変更あり

上記のスケジュールをもとに活動する予定であったが、長浜バイオ大学では新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、大学内外を含めた課外活動が禁止になった。そのため、5 月に実施予定であったサツマイモの作付けを 9 月頃に変更することにした。しかし、国内における新型コロナウイルスの感染拡大が終息せず、それに伴い学生の課外活動の活動禁止期間が延長となり、10 月 22 日から条件付きで活動再開が承認された。しかし、活動条件に「学内外で実施する通常活動以外のイベント等の活動自粛」「他大学や学外団体等との合同練習や練習試合、遠征、交流企画等の実施や参加の自粛」があることから本事業を実施することが困難になった。また、大学担当者と話し合い、「地域の保育園児たちとの交流」を行うにあたって十分な感染予防対策が取れないこと、また借用している農地の管理ができないという結果になったため、当プロジェクトを実施しないことに決定した。

4. 目的の達成状況、成果

今回は、新型コロナウイルスの感染拡大の予防措置が十分に取れないとしてプロジェクト中止しました。具体的な中止理由として「肉体労働のため常時マスクの着用は難しい」「大学生との触れ合いも目的であるため 3 密を避けることができない」「野外での活動のため十分な手指消毒をすることができない」「農地の管理ができない」などがあります。コロナ禍の中であっても農業従事者の減少は重要な地域課題です。次年度の活動方針では with コロナを意識し、こんな時代だからこそ実行できる事業計画のもと課題可決に取り組んでまいりたいと考えています。

5. 課題、懸案事項

今回は「新型コロナウイルスの感染拡大に対しての予防措置が十分に取れない」「大学の課外活動として、活動しているために制限がある」この二つが大きな課題でした。これらの課題は、活動内容の変更を行い、消毒をできるように水とアルコールの準備を徹底することである程度は解決できます。そして、今回の活動のように私たちが主体となり、活動をするだけでなく、サポートする形での活動を行えるようにすることで課外活動としても活動を行えるようにしていきたいと考えております。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（最終）

No. 7

プロジェクト名（活動テーマ）： 訪日外国人旅行者（インバウンド）に向けた草津の魅力発信～ふらっと寄りたい草津旅～	
提案者	：龍谷大学理工学部 実習講師 岩嶋 浩樹
自治体担当者	：草津市商工観光労政課 重政 宇政
大学担当者	：龍谷大学理工学部 実習講師 岩嶋 浩樹

1. 取組体制

・龍谷大学

ハード・ソフトウェアを用いた観光誘致コンテンツ作成へ向けた検討

・草津市役所

参考資料の提供、撮影場所の許可申請、市役所のホームページへの情報を掲載、その他の関連機関や企業への掲載依頼や紙媒体設置依頼

2. 背景・目的

昨年は訪日外国人旅行者に関する調査の情報収集をすることで、集客方法についてまとめた。次に草津市には魅力があるにも関わらず、あまり認知されてない事が判明したため、それらを併せた情報発信の手法を考えた。

以上より、今年度は昨年度の成果を元に草津市の訪日外国人旅行者増加を目指すために、情報発信コンテンツを作成に向けた検討を行った。

3. 活動内容

【当初の活動予定】

訪日外国人旅行者が行きたいと思うパッケージツアーの提案を行い、パッケージツアーを体験した様子をホームページ上でコンテンツとして配信する。また、SNS を活用することによって草津市の認知度を上げる。

3月～6月：パッケージツアーの検討・作成

6月～7月：現地撮影と構成（写真撮影、動画撮影、ホームページ作成など）

7月～10月：データ構成と制作（SNS、ホームページなど）

10月～11月：発表としてまとめる

【実施に向けての検討】

新型コロナウイルスの影響によりグループワーク及び現地での撮影等が困難であった。そのため、Zoom を介したオンラインでの活動を行った。また、次年度、ホームページの作成や SNS による情報発信を実施するための検討を行った。さらに提供するコンテンツに AR 技術の導入を検討した。

4. 目的の達成状況、成果

新型コロナウイルスの影響により訪日外国人旅行者にここ数年は来て貰う事は難しいと考え、パッケージツアーなどを直ぐに提案するのではなく、新型コロナウイルスが収束に向かい、旅行が安心して出来る環境になった際、草津に行きたいと思える様な取り組みが必要だと考えた。

その結果、インターネットを用いたホームページだけではなく、SNSは勿論のこと、最新の技術を取り入れたメディアで発信する事により、新型コロナウイルスが収束した際に多くの訪日外国人旅行者の獲得できる仕組みを検討出来た。

5. 課題、懸案事項

新型コロナウイルスの影響により、現状ではいつ訪日外国人旅行者が安心して旅行できるか分からないと云う問題や、たとえ終息後も主要都市など、人が集まりやすい場所を避けたがる旅行者が多くなると予想できる。

その様な事を踏まえた上、如何に草津を周知するかが課題でもあり、懸案事項とだと考えられる。

No. 8

プロジェクト名（活動テーマ）： 大学生による子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動 ～S（スマート）にN（ネット）を使えばS（スマイル）に～	
提案者	びわこ学院大学 BGU 若鮎隊 教育福祉学部教授 内藤 紀代子 教育福祉学部子ども学科 橋山 ゆず波、久野 翔瑚
自治体担当者	滋賀県総合企画部 県民活動生活課 消費生活・安全なまちづくり係 藤澤 隆二
大学担当者	地域連携研究支援課 澤井 二三夫

1. 取組体制

滋賀県総合企画部 県民活動生活課消費生活・安全なまちづくり係と滋賀県警のご指導を受けて、びわこ学院大学の学生がネット犯罪予防の知識を習得し県下の教育機関で出前講座を実施する。今年度は滋賀県警のサイバー犯罪対策課の協力を得て大学生が出前講座を行い、性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動を行なった(図 1)。

子どもたちへの性犯罪予防のSNS使用の啓発活動の取り組み体制



図 1 組織体制の概要

2. 背景・目的

滋賀県は、スマートフォンやパソコンの所有数量が全国第 1 位である。しかし、子どもや女性が性犯罪に巻き込まれる被害も増加している（H30 年度の 789 件：参考滋賀県 HP）。性犯罪の多くが SNS と関係しているため、ピアサポート効果を期待して大学生が安全な SNS の使い方を小中高生に講演やワークショップを行ない性犯罪予防の啓発を行なう。

3. 活動内容

滋賀県警察サイバー犯罪対策課が養成している「滋賀県警察サイバーボランティア」の教育訓練を受けた大学生が、大学の教員指導のもとでネットやSNSを介しての性犯罪やトラブルに巻き込まれないための教育講演のスライド作成や教育プログラムを作成し啓発を実践する。

実施は、要請を受けた滋賀県下の小中高校やイベント等で行う（図2）。



図2 活動内容の全容と成果

4. 目的の達成状況、成果

①啓発活動に向けての大学生育成の成果

- 啓発活動に向けての教育訓練：滋賀県警察サイバー犯罪対策課が養成している「滋賀県警察サイバーボランティア」の教育訓練を受けた大学生が **3名**
- 活動メンバーの強化と増員：教育訓練を受けた大学生からレクチャーと大学教員からネットトラブルや犯罪に関する講義を受け活動に備えた大学生が **8名**

*上記の11名が、滋賀県下の教育施設で「性犯罪予防のSNSの使い方」啓発活動の出前講座を実施する準備が 今年度完了

②啓発活動の実践の成果

- 啓発活動の実績

実施日	教育機関場所	対象児童・生徒数	実施大学生数
7月9日	栗東市内中学校	80名	1名
7月15日	甲賀市内高校	110名	1名
7月15日	甲賀市内高校	70名	1名
7月22日	守山市内小学校	68名	1名
9月24日	東近江市内中学校	164名	2名
10月14日	蒲生郡内中学校	160名	2名
11月4日	蒲生郡内高校	151名	2名

11月19日	彦根市内高校	320名	1名
12月2日	近江八幡市内中学校	35名	2名
R3年			
2月26日	近江八幡市内中学校	180名	2名
3月11日	日野町内高校	157名	3名

*今年度、11校で1495名の児童・生徒を対象に出前講座を述べ18名の学生が実施完了



サイバーボランティアとして滋賀県警の指導を受け出前講座をしている大学生



東近江市内の中学校と彦根市内の高校で出前講座を行なっている大学生

5. 課題、懸案事項

今後の課題は下記3点である。

- 教育機関での出前講座：出前講座実施の継続と拡大
- 次年度の保護者向け出前講座：バージョンアップしたスライドの作成
- 新型コロナウイルス感染症予防を考えた上でのイベントの企画

懸案事項は下記の点である。

- 新型コロナウイルス感染症拡大に応じて事業の実施の調整や予定している出前講座やイベントの中止の可能性
上記の場合は、リモートや別の代替案で本事業が展開できるように計画する。
- トラブル時の対応の啓発の強化、SATOCO の周知

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 9

プロジェクト名（活動テーマ）： 就学前児童から科学の面白さを体感させる実験・ものづくりプロジェクト	
提案者	： びわこ学院大学教育福祉学部 教授 箱家勝規
自治体担当者	： 大津市科学館 指導主事 寺畑由裕
大学担当者	： びわこ学院大学地域連携研究支援課 課長 澤井二三夫

1. 取組体制

本大学の箱家ゼミ生（3 回生、4 回生）が「サイエンスチーム」を立ち上げ、ゼミ活動のひとつとして実践してきた。

ゼミ生は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生が中心で、小中学校の理科教育とのつながりを意識させながら取り組んできた。特に、実験内容やものづくりはの内容はもちろんのこと、「子どもへの問いかけ」「演示方法」「実験方法」などにも綿密に話し合いながら興味関心が高まるようなやり方で安全性を重視して進めてきた。

2. 背景・目的

就学前児童や小学生が科学実験やものづくりに関わる機会は極めて少ない。また、学童(児童クラブ)においても同様である。特に今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、このような機会は一層減少している。大津市科学館を会場にして、親子を対象に科学実験やものづくりを行ったり、学童に集まる子どもたちを対象に科学の面白さを感じさせたりして、科学への興味を高める取り組みをしていくことを目的とした。具体的には次の通りである。
①子どもにとって楽しいこと。②小学校理科とのつながりを意識させること。③地域との密着を大事にしていること。④「問いかけ」「実験・演示方法」「ものづくりの手順」を大事にしていること。⑤安全であること。

3. 活動内容

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、大学においては構内封鎖があったり、大津市科学館においては9月末までイベントはすべて中止となったりした。しかし、そのような中にもかかわらず、8月に子ども園で1回、10月からの大津市科学館の取り組みが12回できた。準備期間が短く取り組みの内容は必ずしも十分ではないが、約半年間の活動内容を報告する。

（1）「こすって、ふるわせ、水にうかぶ“え”」

- ①令和2年8月18日（火）10:00～12:00
- ②大津麗湖こども園 参加人数 児童 14 名
スタッフ 5 名
- ③「クリップを方位磁針に」「音の振動で動くヘビ」「糊を使って絵を水に浮かばす」の3つの実験を行なった。



④2時間あまり子どもたちは夢中で作ったり、触ったりして喜んで遊んでいる姿が見られた。これらの実験は家庭や園でもできるものとしてスタッフに詳しく作り方を紹介した。

(2)「空気でたおそうポンポンポン」

①令和2年10月3日(土) 13:10~13:35

②大津市科学館 参加人数 児童4名 保護者4名

③ペットボトルと風船のゴムを使い、風の力で“的”を動かす空気砲づくりである。

④製作と遊びが20分程度で済むように事前準備を行なった。最後には、巨大空気砲で風の力を体感させた。



(3)「パタパタロボット」

①令和2年10月17日(土) 13:10~13:35

②大津市科学館 参加人数 児童12名 保護者8名

③磁石のSとNの性質を利用したものづくりである。

④磁石の引き合う、反発し合う性質を使ったおもちゃで、紙で作ったロボットを動かすたびに、パタパタと足や頭が動くもので、その面白さに参加者は夢中になっていた。



(4)「音なくないコップ」

①令和2年11月7日(土) 13:10~13:35

②大津市科学館 参加人数 児童12名 保護者7名

③エナメル線と磁石、紙コップを使ってスマートフォンのイヤホンを製作した。

④身近なデジタル素材が、基本的な電流の働きであることを小さな子どもにも楽しめるようにした。紙コップから音楽が流れ出したときには会場から歓声が沸いた。

(5)『-196℃のひみつ』

①令和2年11月23日(月祝) 13:00~16:00

②大津市科学館 参加人数 児童約60名 保護者約40名

③-196℃の液体窒素を使い、その冷たい世界を体感する実験である。約30分未満の演習実験を5回実施したが、科学実験らしい面白さが満載である。

④-196℃の中に、バラの花を入れたらどうなるのか、バナナを入れたらどうなるのか、風船を入れたら割れるのか、二酸化炭素や酸素を入れたらどうなるのかなど、普段の学校でも経験することのできない実験を体験してもらった。子どもたちだけでなく大人も興味津々で時間を忘れて見入っている姿があった。



⑤学生が-196℃の液体窒素を扱うのは初めてであるが、二酸化炭素ガスを冷やせば子どもたちも知っているドライアイスができること、バナナを液体窒素に入れたら水分が凍って氷のように堅くなること、酸素ガスを冷やすと液体になりその中でもものが燃えつづけ

ることなどが体験できた。

(6)『バランス天狗』『サンタがとんできた』(同じ内容)

①令和2年1月21日(土)・12月13日(日)

13:10~13:30

②大津市科学館 参加人数 児童4名、保護者4名・
児童5名、保護者5名

③割り箸や針金、粘土を使って、一見アンバランスな
「やじろべえ」を作らせ、重心について学習させる。



④「やじろべえ」は学校でも作らなくなった。保護者を交えて活動に参加をしてもらった。
倒れそうで倒れない『バランス天狗』『サンタがとんできた』を作ると感動の声があがった。
物体の重心を感じとることができた瞬間でもあった。

⑤バランストンボは設計図通りに作れば、全員ができあがるが、今回の『バランス天狗』『サンタがとんできた』は、作り上げてから重心搜しの調整が大切になる。また、この活動が重心の感覚を理解することにつながる。そのためには、「重心とは何か」について子どもたちにもう少し触れていく必要があった。

(7)『あわてんぼうのサンタクロース』

①令和2年12月5日(土)13:10~13:30

②大津市科学館 参加人数 児童6名 保護者6名

③5年生で学習する「振り子の運動」につながるものづくりである。

④紙コップ、割り箸、油粘土、画用紙があれば誰でも簡単に作ることができる。割り箸の長さの違いにより、周期の違いや簡単な法則性に気付かせることができた。

⑤実際の振り子と同じ働きであることを演示して説明していけば、つながりをより体感できたと思われる。



(8)『みんなでコケコッコ』

①令和3年2月13日(土)13:10~13:30

②大津市科学館 参加人数 児童7名、保護者6名

③音の学習は第3学年で「物がふるえて音になる」と学習する。糸を震わすことで紙コップに共鳴させて大きな音が鳴ることに気付かせることができた。

④たこ糸と紙コップでニワトリの声に似た音が鳴るため、このようなテーマにした。紙コップのそこに穴を開けてたこ糸を通して、そのたこ糸をぬ



れたティッシュでつまんで引っ張ると、たこ糸がティッシュとの摩擦で振動し音が鳴る仕組みである。紙コップの代わりにペットボトルや段ボールの箱で試した実験を演示した。

⑤様々な音が出て、面白いというだけでなく、大きな箱と小さな箱の違いの法則性に気付かせるような説明があればさらによかった。

(9)『浮かぶジェリーフィッシュ』

①令和3年2月23日（火祝）13:10 から 13:30

②大津市科学館 参加人数 児童 14 名 保護者 13 名

③スズランテープ、細長いゴム風船とティッシュを使い、擦って静電気を起こし反発する性質を利用した実験である。

④静電気は中学校で学習するが、生活に密着した静電気を使った遊びを体験させたいと考えた。ジェリーフィッシュとは、クラゲのことである。

⑤スズランテープに静電気ができたかどうかは、それぞれの反発で毛が立ったような状況になる。それができているかどうかは成功の鍵であるが、それを指摘できなかった。数回擦るだけでできることや擦るときの注意点をしっかりと伝える必要があった。



4. 目的の達成状況、成果

今年度は新型コロナの影響で、予定を大幅に変更せざるを得なかった。しかし、麗湖子ども園や大津市科学館の協力のおかげで夏以降に実践することができ、次のような成果が得られた。

- ・大学が大津市科学館と連携してイベントに定期的に参加をすることにより、まず、科学館の集客が期待できた。また、学生にとっても、親子を相手に演示したり指示や説明をしたりできる機会が得られ、さらには子どもと接する機会が増えて、大きな刺激となり学びの場が広がったことは大きな収穫である。

- ・様々な実験やものづくりは、子どもの安全面や興味関心、さらには小学校理科とのつながりを意識して、時間をかけて準備してきたものばかりである。小学校にボランティアとして参加してもサブとしてばかりで、自分で考えて計画したことを子どもたちの前で披露できる機会はほとんどなかったといえる。それに対して、わくわくサイエンスでは、学生が考えたことが実践できるメリットがある。子どもを対象にした活動の経験が少ない学生にとって、準備の大切さを痛感することができるよい機会になった。

5. 課題、懸案事項

- ・新型コロナ感染拡大防止のために、大津市科学館の場合は本来の集客人数を大幅に少なくして実施をせざるを得ない状況であった。会場の都合があり、多くの人数の前で科学実験やものづくりができなかったのが残念であった。また、飛沫感染防止のためのパーテーションの設置により活動内容が制限される場面があった。コロナ禍の中でできることを模索していきたい。

- ・「ものづくり」は子どもの思考を活性化し、集中力を高めるのに適切な活動といえる。特に学校外で行うことで子どもの興味や関心をより高めることができた。その時間だけの活動だけでなく、家にかえってからやってみようという気持ちにさせておくこと、保護者にも続きをしてみたいと思わせることそのものが大事であると感じた。

- ・次年度の9月に、大津市科学館と箱家ゼミが協力して、「科学実験・ものづくり」に参加できる親子を募集して、「サイエンスショー」を開催する予定である。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 10

プロジェクト名（活動テーマ）： 「お弁当ラリー」を通じた「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト
提案者：滋賀県立大学「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト 滋賀県立大学大学院環境科学研究科 2 年大賀雄介、滋賀県立大学環境科学部 3 年下口晴輝、同 2 年平田裕一
自治体担当者：大津市役所・商工労働政策課・望月隼
大学担当者：滋賀県立大学地域共生センター地域連携コーディネーター・谷口喜之

1. 取組体制

- ①滋賀県立大学「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト：まち歩きコンテンツ企画・実施・開発
- ②滋賀県立大学：大津市との連携協定に基づき副専攻地域共育プログラムや環びわコンソ科目におけるフィールドワーク先として位置付ける等して学生・教員のかかわり・指導を促進・担保。
- ③大津市役所：事業の広報
- ④滋賀トヨペット Boss 百町物語：ナカマチ商店街を構成する丸屋町・菱屋町・長等各商店街と大学との窓口として各種調整、学生チームへの助言

2. 背景・目的

大津市ナカマチ商店街は、生活様式の変化、周辺商業地との競合、空き店舗の増加等により活力が減衰する状況にあるが、歴史や町並、各店舗に着目すると他にはない魅力があることが分かる。そこで、商店街の資源をつなぐコンテンツを開発することによりまちの魅力を発信し、近隣に居住する子育て世代や観光客の取込みを図る。

3. 活動内容

提案書提出時点では「1)参加者が商店街を巡り、食材等を買集めながら、商店主との対話を通じて地域や商品の魅力に触れる。2)食材を折箱に詰め、商店街の魅力が凝縮したオリジナル弁当を作る。3)写真を SNS などで発信する。以上のイベントを「お弁当ラリー」と名付け、学生チームが商店街関係者と連携して数回にわたり企画・運営・実施する。実施結果をもとに観光・まち歩きあるいは地域学習コンテンツとして開発・定着させる」と記載し、順次実行する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響によって、活動の見合わせを余儀なくされた。

そこで、今年度はイベントの実施を主目的とするのではなく、「お弁当ラリー」というコンテンツを、学生イベントとしてでなく、商店街において日常的に提供できるサービス・コンテンツとして確立するための方策について検討を進めることにした。

4. 目的の達成状況、成果

学生による単発のイベントとしてではなく、商店街の恒常的なコンテンツ・サービスとして確立できるよう検討を進める中で、当初から取り組み体制に加わっていただいている連携先に加えて、財務省近畿財務局大津財務事務所並びに公益財団法人滋賀県産業支援プラザからは、「お弁当ラリー」を持続可能なビジネスモデルとして展開することについて、担当者レベルで連携・支援の申し出を頂いたところである。

中間報告の段階では、1月中にナカマチ商店街において、新型コロナウイルス感染症拡大の状況を見極め、with コロナの工夫をおこないながら「Go to 商店街」事業としてイベントを実施する計画であったが、同時期に流行の第3波に見舞われ、商店街のイベント自体が見合わせとなったのに伴い、結局、お弁当ラリーも実施することができなかった。

一方、滋賀県立大学では、当プロジェクト発足のきっかけとなったフィールドワーク科目「地域デザインA」を2月19日～20日の3日間にわたり実施。ナカマチ商店街もそのフィールドワーク先となっていた。今年は現地でのフィールドワークに代えてオンラインで商店街と大学とをつなぐ形で、お弁当ラリーを含む商店街振興策について地元関係者と学生とが意見交換を行った。この授業の中で、お弁当ラリーメンバー学生から受講生に対してお弁当ラリーおよび商店街についてプレゼンテーションを行い、次年度以降のメンバーの確保を図った。この授業にはお弁当ラリーを通じてつながりができた大津財務事務所、日本政策金融公庫、滋賀県産業支援プラザも登壇し、ソーシャルビジネスの手法によって地域課題を解決するためのポイント等についてレクチャー・助言を受けることができたほか、この授業を受講しナカマチ商店街との意見交換に参加した社会人受講生（フリーランスのラジオパーソナリティー）を中心として、集落の空き店舗をシェアオフィス・コワーキングスペース、および商店街の防災放送設備を生かしたコミュニティ放送の拠点としてリノベーションし活用する話が持ち上がり、こうした拠点の事業の一環としてお弁当ラリーを展開することができないか、地元との協議が始まった。

このほか、2020年11月21日に滋賀県立大学主催により開催された「キャンパスSDGs びわ湖大会」においては、学生による地域と連携したSDGsに関わる取組として事例報告をおこなった。

コロナ禍によって実際のイベントは結局一度も開催することはできなかったが、にもかかわらず、今後の活動に向けた連携・協力関係はより一層深まったと言える。

5. 課題、懸案事項

イベントを開催できない中で、次年度以降のメンバーをいかに確保していくかが課題である。

また、新型コロナウイルスの流行の終息時期がいつになり、イベントを実施することができるようになるかが最大の懸案事項である。

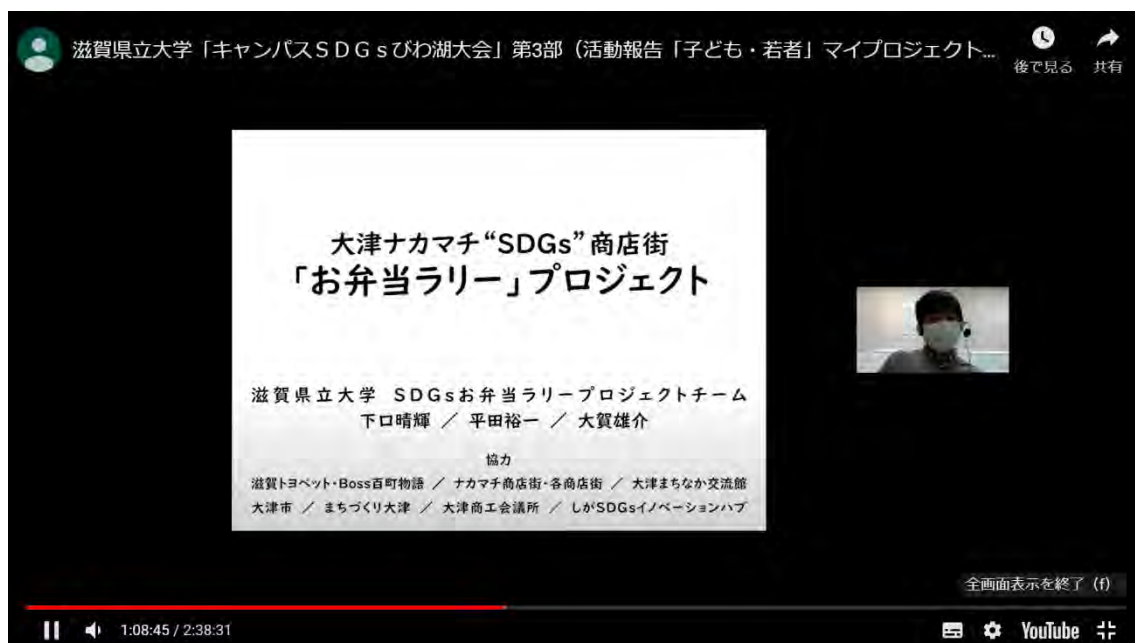


図 1：滋賀県立大学キャンパス SDGs びわ湖大会での活動発表の様子（2020 年 11 月 21 日）

お弁当ラリー・今後の展開

コロナに負けない持続可能なプロジェクトに向けて再起動！

- 新型コロナの影響で一時足踏みしていたが、**現在、再起動に向けて準備中。**
- さらに様々な人たちの力や知恵を借りながら、学生による単発のイベントではなく、商店街が常時訪れる利用客などに対して**毎日でも提供できる持続可能なサービス・コンテンツにすることを**目指したい。
- 将来は参加者による「お弁当写真コンテスト」や、地元町家ホテルなどと連携した観光コンテンツ、地域SDGs学習事業等への展開を図りながら、**持続可能な「SDGs 商店街」の実現に貢献したい。**



図 2：大津ナカマチ SDGs お弁当ラリー活動報告プレゼン資料

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 11

プロジェクト名（活動テーマ）： 「市」を通じた地域の活性化—中山間の「位置」エネルギーを創出—	
提案者	：龍谷大学農学部 淡路和則
自治体担当者	：東近江市農林水産部 中西安治
大学担当者	：龍谷大学農学部 淡路和則

1. 取組体制

龍谷大学農学部の淡路研究室が中心となって、合同会社グリーンラボラトリー、地元自治会、と共同して、百済寺地区での資源の掘り起こしと市の開催運営を行う。人の流れや訪問についての意識やニーズを把握する調査については、愛の田園振興公社、百済寺の協力のもと、淡路研究室が実施する。

2. 背景・目的

農業の衰退、高齢化、過疎化が深刻化する中山間地域の無形・有形の資源を多角的に見出し、ひとに来てもらい、モノ消費、コト消費につなげて地域を活気づけることが重要である。そのために、ひととモノが集まりイベント等も楽しめる地域固有の特色ある「市」を開催し、地域色豊かな商品の開発、交流人口の増加を促す。

東近江市の山間部の百済寺地区において、①地域の特色あるモノ・コトを住民と学生が共同で掘り起こし、②商品開発、行事等の企画開発を行い、③地域の特色を出す「市」を企画する。④道の駅等の客数、百済寺の参拝客数の調査、愛東でのトラベル調査を行って人の流れと訪問意識を把握し、⑤「市」の効果的な開催の時期を検討する。⑥そのうえで「市」を開催し、来場者からの評価を分析して地域農業と「市」の展開戦略を構想する。

3. 活動内容

当初計画では、活動内容は下記であった。

- ①令和2年4月～8月に地域資源の掘り起こしを行う。
- ②初夏に百済寺のマルシェに参加し、秋にも百済寺地区で市を試行的に実施する。
- ③上記のイベント会場において来場者にアンケート調査を実施し、百済寺および周辺地域への関心やツーリズム・ニーズを探る。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大によって、現地での催しものがすべて中止となり、現在もイベントが自粛されている状況であり、変更を余儀なくされた。そのため、地元のマルシェ関連のイベントへの参加も「市」を開催することも断念せざるを得なかった。また、移動の自粛や観光施設等の営業や入場者の制限が行われているなかでの調査等も実施が困難であった。

こうした状況の中で、できることとして、下記の活動を実施した。

1) 地域についての勉強会・意見交換会

百済寺樽プロジェクト代表者、JA 湖東営農指導担当者の2名が来学して、百済寺および百済寺郷の自然条件、歴史と現在抱えている問題についてレクチャーを行い、地域理解を深めるとともに、意見交換を行い、地域おこしに向けてのアイデアを出し合った。

その後、ゼミの時間に地域おこしの事例を通して、地域と関わるうえで何が大切なのかを考えた。



百済寺についてのレクチャー



百済寺郷の農業と暮らしについてのレクチャー

2) 百済寺地区訪問

研究室の3年次学生は、愛東ならびに百済寺に行ったことがないことから、現地理解のために百済寺および百済寺地区を訪問した。現場を案内されて話を聞くことによって、大学でのレクチャー等で知った課題を実感することができた。

また、道の駅あいとうマーガレットステーションを訪問することによって、集客要因と人の流れについて観察し、意見交換した。



百済寺の概要説明



境内巡回視察

3) アンケート調査の試行

百済寺でのアンケートは実施が難しかったことから、近隣にあり集客力のある道の駅あいとうマーガレットステーションにおいて、百済寺の認知度、訪問経験などに関するアンケートを試行的に行った。

アンケートについては、これまでの勉強会と百済寺訪問で得た情報を整理し、研究室の学生全員が質問項目を出し合って合議し、質問票を作成した。また、実施前に、地域の直売所と農業振興に関するレクチャーを受けた。



現地でのレクチャー



農産物直売所と地域農業について話を聞く



アンケート調査（直売所前）



アンケート調査（施設内）

4. 目的の達成状況、成果

・大学での勉強会および意見交換会においては、地域の特性や課題の背景を理解することができ、地域理解の第一歩となった。また、地域振興について話し合うことによって地域と関わる際の大切なことについて意識付けでき、意見交換を行うことができた。

・百済寺地区に実際に訪問することによって、地域のイメージを実感でき、現状と課題に対する理解を深めることができた。百済寺についての訪問の誘引となり得る要素を多角的に把握することができた。

・「市」に関するイベント等の取り組みができない状況がしばらく続くと予想されることから、今年度の活動については、百済寺とその周辺地域についての認知度とツーリズム需要を把握することに目標をシフトさせて、アンケート調査を試行した。

具体的には、近隣地域で入れ込み客数が多い道の駅「あいとうマーガレットステーション」でアンケート調査を実施して、百済寺の認知度と訪問意向について聞き取りを行った。

この結果については、分析中であるが、百済寺については認知度が比較的高くても実際の訪問には結びついていないことや、男性と女性で求める要素が異なることなどがわかってきた。本格的調査に向けての素地をつくることができた。

5. 課題、懸案事項

新型コロナ感染拡大のため、現地へ行くことが極めて限られたため、地域理解を深めるための研究会や交流会を優先的に実施する必要がある。とくに今年度の訪問は、時期的に限られていたため、周年で現地をみられる機会をつくる必要がある。

また、上記と重なるが、現地の住民との方々との交流する機会が持てなかったことから、とくに魅力ある資源を発見するための活動ができなかった。そのための現地観察・現地交流の機会を設定することが必要である。

アンケート調査は、試行的なものであったが、進行中の分析から課題解決に向けての有益な情報が得られてきている。来年度は、本格的なアンケートを複数回にわたって実施し、集客力がある道の駅「あいとうマーガレットステーション」から百済寺地区への人の流れをつくる誘因となる要素を明らかにしたい。

新型コロナ感染の状況がどうなるか予測できないことから、人が多く集まるイベントを開催することは来年度も断念し、百済寺地区への訪問誘引をリサーチし、ツーリズム需要の掘り起こすことによって、地域おこしの戦略を具体化するように活動を進める。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 12

プロジェクト名（活動テーマ）： 甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の魅力を創造する旅、甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）から発信する「すべての人に健康と福祉を（SDGs）」	
提案者	：岡本直輝、西川 幸佑
自治体担当者	：久保 重徳（甲賀市農業振興課）
大学担当者	：岡本 直輝（立命館大学スポーツ健康科学部）

1. 取組体制

- 立命館大学スポーツ健康科学部に甲賀市地域連携チームを設けた。
- メンバーは、学生 8 名（学部生 & 大学院生）と教員 1 名の 9 名で構成している。
- 立命館大学スポーツ健康科学部 10 周年企画として進め、学部内で甲賀市への理解を深めた。今後、甲賀市民の健康増進について連携できる機会にしたいと考えている（現在、健康教室などの支援を行っている）。
- 大学と連携するサポート窓口は、甲賀市産業経済部農業振興課とする。
- その他：事業においては、本プログラムと甲賀市が年間スケジュールを調整し進めている。特に信楽・土山地域の農家や農業団体へのコーディネートは、甲賀市に行っている。

2. 背景・目的

甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の香りは、1 煎目ばかりでなく 2 煎目 3 煎目でも楽しむことができると言われている。これは葉の持つエネルギーが他の銘柄茶よりも高いことが理由である。しかし、多くの若者は、日本茶をゆっくりと味わう機会を持っていない。さらに、お茶を淹れた後の出がらしをゴミとして廃棄することがほとんどであり、再利用するといった発想を持っていない。この点に着目し、SDGs に関連させた取り組みを検討した。またコロナ禍の中で、茶葉に含まれるカテキン類がコロナ無害化の効果があるといったことが報道されていることから、お茶がさらに注目されるのではないかと考える。

コロナ禍になる以前では、健康運動イベント・スポーツイベントが活発に行われてきた。しかし、他の分野（環境や文化社会）に比べると SDGs に関する意識が弱く、スポーツウエアはじめ栄養補給の面で、無駄が多く運動実施者の意識を改めていく必要があると考える。延期となった東京オリンピックでは、大会組織あげて SDGs の取り組みを強調されているが、実際のスポーツ実施者や競技者への意識改革に結びついていない現状である。そこで本プログラムの目的は、甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）を飲み味わうばかりでなく、出がらしの再利用 (SDGs-2) を健康運動・スポーツ場面において創造することとする。特に健康運動、スポーツ活動を実施する者や選手が、出がらしの再利用を意識し、コンディショニングづくり (SDGs-3, 4) に役立つ利用方法について検討する。

3. 活動内容

2020 年度は、コロナ禍の中での活動であったことから予定どおり進まなかった。特に生産者の方々との交流が進まず、プロジェクト独自の調査を主軸とした。しかし、対面授業に参加した 10 名程度のスポーツ選手を対象に、感染予防を徹底させながら、出がらし茶葉の試食を行うことができた。6 月から現在までの具体的な活動は以下のとおりである。

○ 6 月：WEB 会議の中で、下記の点について確認し各参加者が独自で活動を行った。

- ・スーパー、商店街でどのようなお茶が販売され、どのようなお茶の加工品が販売されているのかを調査した（スーパーや商店街のお茶コーナーの前では、様々なお茶の香りで癒されるなどの意見が出された）。

- ・煎茶、緑茶、ほうじ茶、麦茶、番茶等を飲み、自宅で味比べを行った。



＜調査 1＞運動実施者・スポーツ選手が運動前、運動後に飲む飲料水の調査を行った（101 名を対象 WEB 調査）。

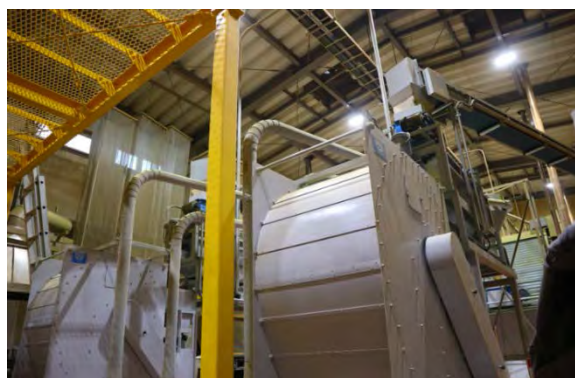
○ 9 月：甲賀市政策推進課との会議を行い、さらに農協（JA）で販売されているお茶（朝宮茶、土山茶）を購入した。

- ・朝宮茶、土山茶の試飲・試食会を行うことを確認した（zoom で参加する場合もあった）。
- ・信楽焼の茶香炉を購入し、茶香を楽しんだ（ほうじ茶の香りに癒されるといった意見が多かった）。

○ 10 月：茶畑見学＆加工工場の見学を行った（甲賀市の協力を頂いた）。

茶畑で扇風機のようなプロペラが設置されていた。これは、防霜ファンと言い、温度の高い空気を送り込む仕組みになっているとのことであった。茶畑は、山間地の広大な丘陵面に設けられている。そのことから、寒暖差が大きく、地表面の温度が下がり霜が降りると茶葉が痛む傾向があることから、空気を送る仕組みが考えられたという説明を受けた。

続いて摘んだ茶葉の加工工場を見学した。茶葉の独特な香りが、工場全体で漂っ



ていた。茶摘みから乾燥までいくつもの工程を得て出荷されることを聞き、我々プロジェクトメンバーは日頃から、様々な手が入ってお茶が生産されていることを理解し、味わって頂かなくはないことを確認した。

また、朝宮茶・土山茶は一煎目ばかりでなく、二煎目、三煎目と味わうことができることを知り、二煎目以降の茶葉（出がらし）の再利用について検討した。

○11月 <調査2>朝宮茶の出がらしの再利用について意見交換を行った。

プロジェクトメンバーが考案した出がらしを用いたレシピを紹介し合った。

○12月 <調査3>調査2を発展させ、出がらしを調理せず、そのまま食べる調査を行った



4. 目的の達成状況、成果

a) 調査1の成果 スポーツ選手101名を対象に、練習前後に主に試飲する飲料水について調査を行った。その結果、最も多く飲まれているのが、スポーツ飲料水であり全体の33%を示し、日本茶(18%)、コーヒー・紅茶よりも有意に高い値を示した($p < 0.01$)。

b) 調査2の成果 クッキー、パンケーキ、オートミールケーキなどに出がらしを入れ調理した。2煎目の出がらしは、苦み、渋みが薄れていることから味のインパクトに欠けるといった意見が出された。我々メンバーは何度も朝宮茶・土山茶を試飲していることから、お茶の旨さが分かり始めている。そのため、茶の旨さを引き出したいという思いが強くなっていることから、茶葉が持つ香、苦さ、渋みといった旨味に拘ったものとする。

・ プライパンで煎ってみると、ほうじ茶の香りが少し漂い、ゴマ等を混ぜ合わせた「ふりかけ」にすると、市販の「ふりかけ」では感じられない香りを味わうことができることが分かった。

・ 出がらし茶葉を入れてご飯を炊いてみると、わずかにお茶の香り、渋みや旨さを味わうことができることができた。少しゴマ塩をかけると、スポーツ選手の塩分補給にも繋がると考える。

・ 提案された調理案をまとめると、運動実践者やスポーツ選手にとって、抹茶を用いたレシピ(ケーキ、パン、パフェ等)の真似をするのではなく、茶葉の渋みや苦みを引き出すレシピのほうが合うのではないかと考えられる。左側の写真にみられるように、2煎目の茶葉を茶香容器(写真の左)で煎り香りを楽しみ、出がらし茶葉を入れ炊いたご飯を用いたおにぎりが喜ばれるのではないかという意見が多かった。その議論のなかで、スポーツ選手は日々の練習や試合前等、リラックスするといった行動が求められる。出がらしは、そのリラックス、緊張を和らげるといった効果があるのではないかと考えられる。

c) 調査3の成果 プロジェクトメンバーが関わっているスポーツ競技の選手26名を対象に、朝宮の1煎目後の出がらし、2煎目の出がらしを用いて、試食させ感想を得ることができた。結果

を表 1 に示す。1 煎目後については、茶葉の香りが強くお茶らしいといった感想を得たが、その

表 1 出がらしを試食した後の感想 (26名)				
	1煎目後	2煎目後	t値	有意差
	平均±標準偏差	平均±標準偏差		
香が強い	2.96±0.65	2.04±0.52	6.87	$p < 0.01$
お茶らしい	3.38±0.56	2.31±0.54	8.06	$p < 0.01$
すっきりしている	2.85±0.72	2.92±0.67	0.44	ns
甘い	1.27±0.44	1.15±0.36	1.43	ns
渋い	3.77±0.58	2.62±0.49	12.50	$p < 0.01$
苦い	4.08±0.55	2.54±0.57	12.22	$p < 0.01$
旨味がある	2.46±0.75	2.65±0.62	1.20	ns
酸っぱい	1.73±0.76	1.27±0.44	3.65	$p < 0.01$
味が濃い	3.15±0.66	2.08±0.47	8.06	$p < 0.01$
後味がよい	2.54±0.80	3.19±0.56	3.53	$p < 0.01$
バランスが良い	2.35±0.73	3.19±0.56	5.9	$p < 0.01$
好き	2.38±0.84	3.42±0.79	4.78	$p < 0.01$
リラックス	3.08±0.73	3.54±0.57	3.07	$p < 0.01$

1: あてはまらない

⇔

5: 当てはまる

ことが影響してか、苦み、渋みが強く感じる
といった結果を得た。2 煎目後は、苦み、渋
みが低い後味がよいといった感想が多か
った。また、口の中がさっぱりし気分転換に
繋がるといった感想が多く出された。そのこ
とが、リラックスする行為に良い影響を及ぼ
すのではないかと考えられる。スポーツ選手
は、日々の疲労を軽減するために独自の手法
で音楽を聴くといった行動等をとっている
が、その行動を支援する働きがあるのではな
いかと考える。

5. 課題、懸案事項

2020 年度は、コロナ禍の中で十分な活動ができなかった。しかし、茶葉を用いたレシピをプロ
ジェクト内で共有することができた。また、出がらし茶葉を食べることについての官能調査を
行うことができた。調査を実施する中で、クッキング関連の HP 上でいくつか紹介されたレシピ
を真似てみたが、茶葉の持つパワーを十分生かすことができないと考える。特に、甲賀茶の旨
味を感じることができないと考えられる。

そこで、2021 年度は、スポーツ選手に効果がある出がらしを用いた食事法、リラックス法を
さらに提案し、官能調査を同時に進めたいと考えている。具体的には、下記の計画で進めた
い。

○滋賀県で活躍する選手を対象に、甲賀茶の認知度調査

認知度 (知っているか?)、飲んだことがあるか、見たことがあるか等の質問

○出がらしを用いたレシピを紹介することが、運動実践者やスポーツ選手の SDGs の取り組み
を促進することにつながるのか

出がらしを用いたレシピパンフを配布し、SDGs の活動への取り組み意識を調査する

○出がらしを用いた、炊き込みご飯の工夫

炊き込みご飯に焦点をあて、学生がおいしく食べることができる調理法の提案

○出がらしを食べることによるリラックス効果の調査

2020 年度官能調査をさらに発展させ、スポーツ選手の「あがり」「緊張」「集中」に効果があ
るかを調査する

○甲賀茶の魅力の発信 (HP 上)

甲賀茶畑、加工工場、お茶の飲み方、出がらしを用いたクッキング法の紹介、スポーツ選手
へのメッセージをまとめ HP で発信する

6. 参考文献

・濱口郁枝 ほか (2009) ペットボトル緑茶飲料における見た目と味の官能評価. 日本官能評
価学会誌, 13: 125-129.

・楽天レシピ <https://recipe.rakuten.co.jp/> (参照 2021-3-5)

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 13

プロジェクト名（活動テーマ）：国史跡紫香楽宮跡を活かした地域振興について	
提案者	：紫香楽宮跡整備活用実行委員会 実行委員長 水野藤志夫
自治体担当者	：甲賀市 歴史文化財課 主査 渡部圭一郎
大学担当者	：立命館大学 経済学部 教授 黒川 清登

1. 取組体制

「紫香楽宮跡活用委員会」を発足。体制は以下。

会長：雲井自治振興会長

実行委員長：水野藤志夫 紫香楽宮跡整備活用実行委員会 委員長

事務局：金谷英三 新事業企画実行委員会 委員長、顧問：里見淳市議会議員

協力：立命館大学経済学部 黒川ゼミ「紫香楽宮まちづくりチーム」 大学は、地域資源の発掘、活用の可能性を若い視点で必要な調査などを担当する。

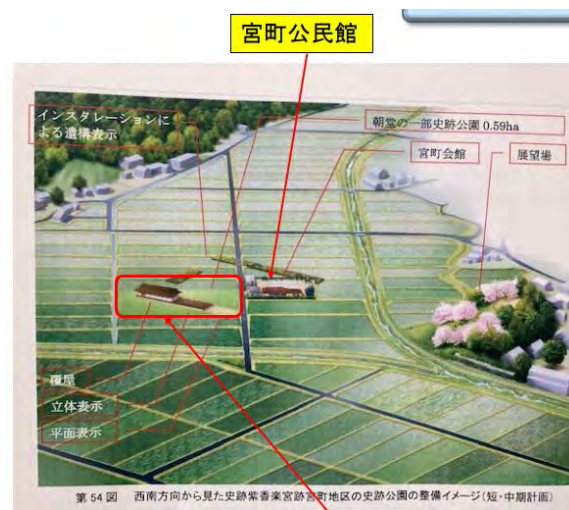
甲賀市歴史文化財課、宮町営農組合

2. 背景・目的

甲賀市信楽地区には、国史跡紫香楽宮跡、飯道神社等の地域資源がある。立命館大学では、平成 30 年春から調査協力を開始し、雲井自治振興会との史跡活用ワークショップを重ね、令和元年には、紫香楽宮跡の活用の地域住民の意向を明確にした。

令和 2 年度年には史跡公園を設置する方針が決まり、本会が設置された。本格的な史跡公園の供用はおおよそ 5 年後を目指している段階だが、史跡公園を地域の活性化の核とするために、どのような公園にすべきか、周辺はどのように整備すべきかを明らかにする。

（写真－1 国史紫香楽の宮史跡公園の予定地）



3. 活動内容

コロナ禍で学生の参加が難しい時は Zoom により、跡地の公園化に向けた会議を重ね基本的な考え方をまとめてきた。令和 3 年度はこれまでの成果を踏まえ、植栽の試験実施、地域住民、来訪者に対するアンケート調査を行い、史跡公園設置に向けたニーズを明らかにしてきた。今年度は、「紫香楽」の 3 文字から連想されるような、ハーブによる「紫」を周辺の公園などで植栽できるかを検討している。

史跡公園の植栽については、周辺住民も協力しながら、景観の統一感を高める。これまでの協議では、鹿などの獣害による被害が多々報告されており、史跡公園予定地地区においては、柵を設置するか、ハーブなど動物に食べられない植物を植えることを検討している。史跡公園では、VR（ヴァーチャルリアリティ）を取り入れている地域も多々あり、学生はその可能性も検討する。

(写真—2：Zoomを使用したテレビ会議の様子 2020年9月25日)



4. 目的の達成状況、成果

来訪者へのアンケート調査については、QRコードを来客が予想される場所に張り付け、来訪者から回答を得ることは、2020年11月より実施中である。但し、コロナ禍と冬季の寒さのため来客は非常に少ない。

また、コロナ禍で実施が難しかった、甲賀市民に対する対面による調査は、2021年2月のコロナ感染者数が2回目の非常事態宣言を受けて減少したところから開始し、既に70件程度の回収が完了している。3月中には、100件を目標に回収をつづけ、その成果を甲賀市役所ほかにも、報告する予定である。

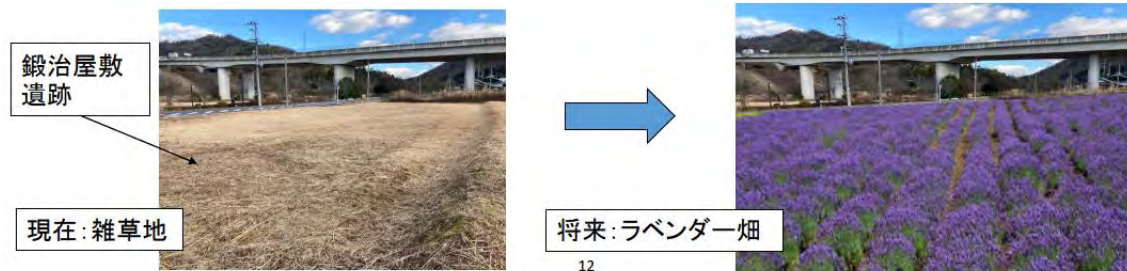
(写真—3、4 紫香楽の宮の案内図に設置した来訪者向けのQRコード)



5. 課題、懸案事項

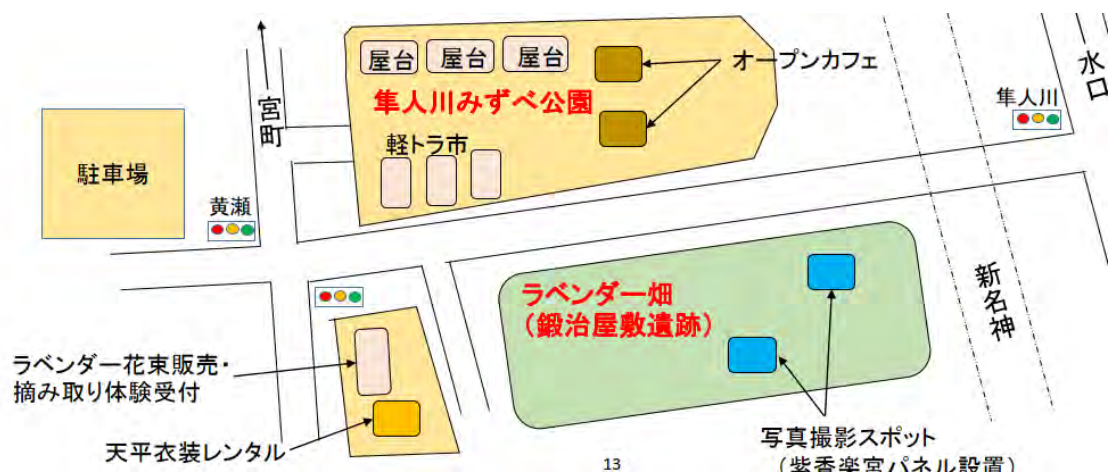
最大の課題は、コロナ禍でハーブの試行的植栽、軽トラ市、アンケート調査などの実施が困難になることである。また、ハーブの植栽は、気候が合い繁殖するか、野生動物の被害問題は生じないのか、必要な分量の植栽が史跡公園の開設まで、どの程度可能かなどの課題がある。

(写真5. ラベンダー畑のイメージ)



ラベンダーの植付けは、地域住民が各家庭で増やしたハーブで賄えるか否かも検討中である。

(写真6 隼人川みずべ公園とラベンダー畑の予定地)



なお、当該ラベンダー畑予定地の地権者は、ラベンダー畑構想には、すでに口頭で了解を得ているとのことである。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 14

プロジェクト名（活動テーマ）：神仏習合の里、甲賀杣谷のストーリーブックをつくる	
提案者	：幡野 遥
自治体担当者	：佐野 正晴
大学担当者	：武田 史朗

1. 取組体制

立命館大学景観建築研究室、福生山櫟野寺、甲賀市歴史文化財課の連携で取り組む。立命館大学の学生および指導教員が主な実働を担う。櫟野寺と甲賀市が、歴史文化の情報提供、地域の関係者へのヒアリング許諾などの仲立ち、寺院や市役所のホームページ上での掲示や観光産業への紹介他、成果の発信などを行う。当初は、大原学区を中心とするネットワークで、地域住民の方々や、周辺社寺などの皆様に、ヒアリングやワークショップを行うことを通した取り組みを想定していたが、コロナ禍の影響より、現在までのところ、研究室単独での文献調査と、一部の研究機関へのヒアリングによる取り組みとなっている。

2. 背景・目的

甲賀市、杣川沿いの地域は、古代・中世の自然への畏れと敬いを今に伝えている。有形無形の文化（神仏習合・密教など）を受け継ぎ、もたらされた環境に学ぶべき資源が多い。こうした歴史背景は目に見えにくい、地域・広域にその価値が十分に認知されるべきである。そこで、一般にもわかりやすく伝える手軽な媒体を製作したいと考えた。杣谷に関しての資料は少なく、実際の歴史的背景を辿っていくことは難しい。そこで、本活動は、様々な分野の既往研究の調査や住民に対するヒアリングを行い、仮説的なストーリーをつくり上げることを目的とする。

3. 活動内容

活動内容としては次のような順序で進める予定であった。①個々の神社仏閣の由緒や歴史背景、杣街道の歴史、言い伝えを既往研究や関係者、学識者へのヒアリングで調査する。②地域の過去と未来に向けたストーリーを描くワークショップを行う。③結果を一般の人々がとりつきやすい内容と分量のストーリーブックにまとめる。④成果を市役所や地域の社寺に設置することを依頼し、可能であれば、ブックレットやHPのコンテンツとして広く伝える手段を講じる。

当初の予定では、大原学区の集いや市民団体主催のイベント等に足を運び、オーラルヒストリー（口述歴史）を組み立てるつもりであった。しかし、新型コロナウイルスの拡大防止のため、参加予定であった大原円卓会議が延期されたことにより、市民の方の間でも外出や人との接触に懸念を持たれていると判断した。それにより、今年度の春から夏にかけては文献調査を中心に行うことにした。秋口からは、大人数の集会は避け、有識者の方を中心に個人でアポイントを取って直接お話をうかがったり、史料・資料を見せていただいたりするように活動内容を変更した。具体的に訪問したのは、甲賀市くすり学習館・館長の長峰さん、油日神社・瀬古さん、みなくち子どもの森自然館・学芸員の川瀬さん、櫟野寺・住職の三浦さんである。

4. 目的の達成状況、成果

文献調査と一部の研究機関へのヒアリングにより、様々な分野の情報から杣川流域に関して知識が深まってはきているが、それぞれの歴史的出来事の点を結び付けられる段階にまでは及んでいない。よって、集まった知識間を繋ぐような分野や年代を中心にヒアリングを行う必要があると考える。今後は、木挽き職人の家系の方や、周辺社寺、地理学者等の知識を持つ人を中心にヒアリングを行い、資料をまとめていく予定である。

現時点での成果は下記に記すものである。

- ・杣川は、南鈴鹿連峰の油日岳に源を発し、甲南町の中央を東から西に流れ、水口町の西はずれで、野洲川に合流する。

- ・江州甲賀郡絵図と滋賀県農業試験場による土地分類基本調査の土壌図を元に作られた甲賀地域の土壌マップから、油日の辺りに林業が始まる前の古い時代から、広い草原があったことがうかがえる。現にシオノギ植物園の辺りから、野焼きが行われていたことがわかる黒ボク土が採取されている。

- ・2005年に甲南町新治の新名神高速道路工事現場で発見された、加工痕のある巨大な杉の埋もれ木には、復元すれば直径約1m40cmになる巨木もあった。根元には鉄斧による伐採痕が残っており、他にも製材途中の原材などが含まれていることから、この付近で伐採・製材作業が行なわれていたことが分かった。これらの木材は、年輪年代測定によって飛鳥時代（630～690年頃）のものである。

- ・正倉院文書には、甲賀杣に関する記載が多く見られる。

- ・天台宗を開いた最澄が比叡山に根本中堂の建立用材を甲賀に求めたと伝えられる。この際に安置されたのが、櫛野寺の坐仏十一面観音菩薩である。

- ・杣川流域には、「杣」や「杉」が付く地名が多い。

- ・一般に甲賀忍者と呼ばれる集団（甲賀武士）は林業や土木の技術も持ち合わせていた。戦国時代の彼らの拠り所となっていたのが油日神社である。

- ・流域の大部分が古琵琶湖層群の重粘土地帯である。杣川は下刻が著しく、本流から取水できるのは河川沿いのごく一部に限られる。水利形態はため池と天水に依存するため、ため池が多く開かれる。

- ・油日神社は一時、川枯神社と呼ばれていた。（甲賀歴史民俗資料館に保存されている右の絵図に記述されている。）現在も残る祭りは雨乞いに由来している。



5. 課題、懸案事項

コロナ禍の影響もあり研究的な取り組みにとどまっていたことから、次年度の地域連携的活動に力を注ぐべきところであったが、指導教員として参加していた武田が2020年度で立命館大学を退職することとなったため、継続が困難となりました。お詫びを申し上げます。

2020 年度大学地域連携課題解決支援事業報告書（1 年目）

No. 15

プロジェクト名（活動テーマ）：芦浦観音寺納豆再現プロジェクト	
提案者	：立命館大学 食マネジメント学部 准教授 鎌谷かおる
自治体担当者	：草津市環境経済部・商工観光労政課 課長・井上 博道
大学担当者	：立命館大学 総務部 BKC 地域連携課 笠倉研

1. 取組体制

代表者 鎌谷かおる（立命館大学食マネジメント学部・准教授）

→全体総括／調査研究／事務

観音寺納豆研究会（研究補助員上田朋佳／食マネジメント学部鎌谷研究室学生）

研究協力者 西川浄海（芦浦観音寺・住職）

研究協力者 高橋大樹（大津市歴史博物館・学芸員）

研究協力者 八杉 淳（草津宿街道交流館・館長）

2. 背景・目的

本課題は、草津市の芦浦観音寺でかつて製造されていた納豆を、①寺院と食、②近江国の農業生産の歴史、③嗜好品としての納豆製造の観点から分析し、地域における食の在り方の歴史を総合的に解明しようとするものである。

分析結果を通じて、草津市の名産品としての納豆製造の実現化について模索することも視野に入れている。

3. 活動内容

本課題は、当初、以下の4つの取り組みを軸に活動を予定していた。

- ① 芦浦観音寺納豆に関連する古文書の総合的調査
- ② 現草津市域の農業生産（特に大豆）の歴史解明
- ③ 近江国（滋賀県域）における発酵品としての納豆の位置付け
- ④ 観音寺納豆復元に向けての準備

しかし、コロナ禍で全体的に活動を縮小せざるを得ない状況となったため、上記の4つについては、以下のような形で取り組みを実施した。

- ① 芦浦観音寺納豆に関連する古文書の総合的調査
新たな古文書調査を実施せず、これまで調査済みの古文書の写真を用いて筆耕作業を中心に研究室内で実施した。
- ② 現草津市域の農業生産（特に大豆）の歴史解明
高齢者への聞き取り調査は、コロナ禍の中で実施することは難しいため、新たな調査は行わず、これまで行ってきた調査の記録及び写真の整理作業を行なった。
- ③ 近江国（滋賀県域）における発酵品としての納豆の位置付け
大学内で参考文献の整理作業を実施した。

今年度はコロナ禍のため、活動が制約され、予想以上に目的を達成することができなかった。調査に出向かず、学内で、作業できるものとして、以下の作業を実施した。(中間報告のスライドを参照されたい。)

今年度の活動事例

納豆食文化の地域比較

『日本の食生活全集』（農山漁村文化協会刊行、全50巻）を用い日本全国で納豆はどのように料理され食されているのかを調査これまでに北海道・東北・関東の詳細調査が完了し、今年度は中部・関西・中国・四国・九州の全体調査を進めた

種類

日常に根付いた納豆食(新潟県の事例)

蒲添地域

・納豆醤油の実
夏以外はいつでも作り、毎日欠かせない。
ごはんのにせたり焼き魚につける。
混ぜてしばらくおくとかみが出て味がまろやかになり、調味料としても味噌にまさるほど。

古志地域

冬から春先の手軽なおかず。
塩を加えたり漬け菜を混ぜたりもちにかけて食べたりする

岩船地域

正月、小正月のごちそうで3月中旬ごろまでにはほとんど食べる。
納豆もちにしたり塩納豆にしたりもする。
正月の冷え込む夜には納豆汁が作られたりもする。

魚沼地域

冬の食物としてよく用いる。
12月25日はこの家でも正月用に作る。
・納豆醤油の実
田植えや蚕上げの忙しいときのおかず。
納豆というよりもやわらかい大豆の塩漬に近く、暑いときの食欲増進になる。寒中に仕込み、春になると美味しく出来上がる。

今年度の活動事例

鎌倉研究室（上田・三浦・立石・八木・鎌倉）

納豆文化の聞き取り調査結果の整理及び分析作業

対象者：芦浦観音寺周辺在住の60代～90代の女性

Aさん(90代)

軍人の父、母、5人の兄弟(長女)の家庭で育った

・納豆の準備

稲刈りが終わった11月ごろから開始

納豆用の稲わらをつるつにしてから編んでおく

納豆は収穫後、さやをむき納豆を仕込む秋まで乾燥させておく

一升瓶か缶に入れ蔵(涼しい/虫がつかない/湿気が少ない)に保存していた

納豆には夏豆が粘りが弱い傾向にあったという

・納豆の仕込み

年末は餅つきで忙しいため、秋から何度も仕込んでおいた(夏場は作らない)

餅つきの一週間前には納豆を仕込んでいた

大きなかまどで一氣に大量の納豆用の豆を炊いた

・納豆の食べ方と食事内容

1回の食事で米はねじわらで3～4本で炊き、白米・麦に関わらず納豆をかけて食べた食事のおかずは野菜の煮炊きしたものが多く、小学生の頃のお弁当には悪米、たまご、さかな(みりん干し)がはいっていたりしたという1937年にはリヤカーで魚売りが来たり、配給でサバの缶詰もあったという

秋に仕込んだ納豆を冬場から3月ころまで食べていた
納豆を作っていた頃は豆の大きさが均一ではなく、大半が普通サイズの豆だったため、今でもひきわりや大粒は美味しくないと感じるし買わない

Aさんの父は焼き餅の上に納豆をかけた納豆餅が好物で、味噌汁に納豆を入れた納豆汁も良く食べていたという。

納豆汁は汁に納豆を入れる場合と味噌に納豆を混ぜる場合とあり、前者は納豆のおかけでとろみがつき非常においしかったが、後者は胃に残りやすかったという

かつては納豆に塩をかけて食べることが多かったが、今は醤油で食べており、オリーブオイルと酢を入れたり、砂糖を入れたりして食べることもあるそう

③ 調査データ（写真）の整理作業→アルバム作成

鎌谷研究室（上田・三浦・立石・八木・鎌谷）

今年度の活動事例

調査データの整理作業
2020年2月3日に調査をした味噌作りに関するデータの整理作業





漬すのに使用した機械




何度も修理をしながら使用している年代物



納豆を含む豆食文化を総合的に調査

→ 観音寺納豆との比較

→ 寺院と地域の食を通じた繋がり

→ 近江国における農業生産の中の豆の位置付け

※地元で作成される豆に関する「食」をアルバムにして、次年度の聞き取り調査や勉強会で利用できるように取りまとめを行なった。

5. 課題、懸案事項

今年度の経験を踏まえ、今後は以下のことを実施しようと考えている。

- ・オンラインベースでの勉強会や聞き取り調査を実施することを検討
- ・大学内のBCPレベルが下がり次第、学生とともに納豆文化についての調査を再開
- ・コロナ禍の収束を待ち、高齢者への豆文化の聞き取り調査の再開
- ・今年度は、活動縮小のため、助成金のほとんどを返却することとなった。次年度は、そのようなことの無いよう、コロナ禍であっても、計画的に準備を進めて行きたい。